

# 講義理解の手がかりとしての接続表現

－受講ノートの分析による－

伊能 裕晃

【キーワード】 講義理解 接続表現 受講ノート 残存認定 談話の構造

## 1. はじめに

講義を聞いて、受講ノートが取られる際には、講義の談話に含まれる全ての情報が受講ノートに書き留められるわけではなく、情報の選択が行われて、その一部が受講ノートに書き留められる。講義者は自分の伝えようとする情報を何らかの言語的手段によって伝えようとするはずであるが、そうであるならば、受講者のほうもその言語的手段を手がかりとして、情報を把握し、受講ノートを取っているのではないだろうか。講義の際に書かれた受講ノートを分析して、何が受講ノートを取る際の手がかりとなっているかを分析した小沼・石黒(2007)によれば、「接続詞」「構文」「メタ言語表現」などが受講ノートが取られる際の手がかりになっているという。また、石黒(2010)は、講義談話に現れる「接続表現」を分析して、「だから」「ということ」「つまり」「ところが」「では」「ただ」などの「接続表現」が講義において「重要情報を表示する」ものとしている。そして、受講ノートを分析の対象としたものではないが、信森・鈴木(2007a, 2007b)は、講義談話をもとに書かれた要約文を分析して、講義談話の「接続表現」を含む文の情報が要約文に残るか否かを分析している。これらの先行研究は、受講ノートや要約文といった分析対象の違いはあれ、いずれも接続表現<sup>注1</sup>が講義理解の手がかりになりうるという結論に至っている。接続表現は、文章・談話の文脈を展開させるもの(市川 1978、永野 1986)、あるいは、文章・談話の構造を形成するもの(佐久間 1992、2002)とされ、こうした働きを持つ接続表現は、談話の理解にも大きく影響を及ぼしていることが考えられる。本稿は、先行研究である小沼・石黒(2007)、石黒(2010)、信森・鈴木(2007a, 2007b)の結論を踏まえ、方法論的には、新たに統計的分析や講義談話の構造分析を行って、受講ノートを取るという行為と接続表現の関係について、以下の2点を明らかにすることを試みる。

課題① 講義談話において、受講ノートを取る際の手がかりとなりうる接続表現を特定する。

課題②①で特定された接続表現が談話の構造の中でどのように文脈を展開しているかを分析し、談話の構造との関係で、どのような場合に接続表現が受講ノートを取る際の手かかりとなるのかを具体的に明らかにする。

なお、本稿は、筆者が研究協力者として参加している、早稲田大学の「文章・談話研究会」の共同研究の成果の一部である。共同研究において収集された、講義の談話の音声および文字化資料と、講義を受講した学部学生の受講ノートを資料として、本稿の分析は行われる。

## 2. 分析のための資料

### 2.1 講義の談話資料

本稿が分析の対象とする講義は、2001年に東京都内の私立大学で行われた、30代の男性大学教員の講義者Aによる約60分の「文章表現法」の講義である。(全418文、総CU数3,870:CUについては後述)。ただし、この講義では、講義者Aとは別に、調査者Tが、調査について説明している部分があり、418文のうち20文が調査の説明に当てられている。本稿では、今後、この講義を「講義A」と呼ぶこととする<sup>注2</sup>。

### 2.2 講義の受講ノートの資料

本稿の分析の対象となる受講ノートの資料は、講義Aが行われた際、調査者Tの指示のもとに、日本語母語話者の受講者によって取られたノートである。受講者には、「講義を休んだ友達にわかるようにノートを書いてください」という指示を与え、A4版の用紙に、ボールペンを使い、ノートを取らせた。本稿では、この際に集められた27名分の受講ノートを資料として用いる。

## 3. 分析方法

### 3.1 講義談話から受講ノートへの情報の残存の認定方法

#### 3.1.1 情報伝達単位(CU)による単位認定

信森・鈴木(2007a, 2007b)、小沼・石黒(2007)では、講義談話中の、接続表現を含む文、すなわち、接続表現の後件の情報が要約文や受講ノートに取られるかを調べ、接続表現が講義理解の手がかりになるかを分析してきた。しかし、接続表現は後件のみに関わるわけではなく、前後の文を関係づけて、文脈を展開するものとされる(市川1978)。そこで、本稿では、接続表現の後件だけではなく、前件の情報も受講ノートに取られるかを調べ、接続表現が受講ノートを取る際の手がかりになりうるかについて分析を行った。具体的には、接続表現が文頭に現れた場合に

は、前件にあたる前の1文と、後件にあたる接続表現が用いられた当該の文の情報が受講ノートに取られるかを調べた。また、接続表現が文中、すなわち、複文の節の間で用いられた場合には、前の節と当該の節の情報が受講ノートに取られるかを調べた<sup>注3</sup>。

さらに、本稿では、講義談話中の接続表現の前件と後件の情報が受講ノートに取られたかの認定を行うに当たり、講義と受講ノート双方の資料を「情報伝達単位」（以下「CU」と略す）という単位<sup>注4</sup>に区切り、その対応関係の認定を行った。「情報伝達単位」は、佐久間まゆみ編（1989、1994）によって行われた要約文研究で用いられた「原文残存認定単位」ないし「情報単位」を談話にも応用するべく、改良したもので、これにより双方の資料を同じ単位で区切り、対応関係の認定が可能となった<sup>注5</sup>。

### 3.1.2 残存認定の手順

講義の談話の情報が受講ノートのどこに残っているか、対応関係の認定を行う作業を「残存認定」と呼ぶ（佐久間編 1989、1994）が、本稿では、まず講義の談話資料と受講ノートの資料を CU に区切った後、受講ノートのある単位に含まれる情報が講義談話のどの単位の情報と対応しているかを認定して、残存認定の作業を行った。認定に当たっては、最初に、認定者2名で別個に作業を行い、次に、同一箇所でのこの2名の認定に関する判断が一致しない場合には、もう1名判定者を設けて、どちらの残存認定の判断が妥当であるのかを判定した。最終的には、一箇所につき、認定に当たった3名中2名以上の判定結果が一致した場合、講義のある単位の情報が、受講ノートのある単位に残存し、対応していると認定した。次ページの【資料1】は、講義Aの文字化資料をCUに単位切りした例である。【資料1】の「残存数」の欄は、ある単位を何人の受講者がノートに取ったかという数字であり、この欄に「10」とあれば、それは、受講者27人中、10人がノートを取ったことを意味する。【資料1】に見られるような作業を講義談話全体に対して行って、各単位の情報を何人の受講者がノートに取っているかを集計した。

## 3.2 統計的手法による接続表現の前件と後件のCUの平均残存数の分析

本稿では、接続表現の前件と後件の情報が受講ノートに取られているか否かについて、CUの残存数を検討することによって、分析を行うが、この残存数の検討にあたっては、統計的な分析手法であるt検定を用いた。t検定は二つのグループの平均を比較する際に用いられるものであるが、本稿では、接続表現の前件と後件のCUの平均残存数と、接続表現の前件と後件以外の部分のCUの平均残存数の比較を行う際にこれを

用いた<sup>注6</sup>。例えば、【資料1】のCU番号306-1から306-6は、「つまり」を含む文となっているが、この6単位の平均残存数は、5.67となっている。【資料1】では、この他の部分では残存数が全て0となっているが、

【資料1】 講義AのCU切りの例

CU番号	講義談話の文字化資料	残存数
302-1	もちろん、	0
302-2	「っていうか」を	0
302-3	言「ゆ」っているほうにしてみれば、	0
302-4	いきなり	0
302-5	話題を	0
302-6	変えるのは	0
302-7	失礼だから。	0
303-1	だから、	0
303-2	「っていうか」を、	0
303-3	つ、	0
303-4	つ、	0
303-5	使って、	0
303-6	和らげてるつもりなんですけれども、	0
303-7	聞いているほうには	0
303-8	和らげるとは	0
303-9	思えないんですね↑。	0
304-1	「私が	0
304-2	話している	0
304-3	話題を、	0
304-4	あの、	0
304-5	受け入れて、	0
304-6	続けてくれればよいのに、	0
304-7	なんで	0
304-8	この人は、	0
304-9	教えて	0
304-10	わざわざ、	0
304-11	いちいち	0
304-12	言い換えるんだらう。	0
305-1	自分の	0
305-2	好きな	0
305-3	話題に	0
305-4	持っていつてしまうんだらう。」	0
306-1	つまり、	2
306-2	「っていうか」は、	4
306-3	私の論理、	10
306-4	私の内面の押しつけ、のように、	12
306-5	聞き手には	2
306-6	受け取れてしまうということです。	4

仮説としては「つまり」という接続表現が含まれているが故に、この部分で情報が選択され、平均残存数が高くなっているのではないかと考えるわけである。

「つまり」は講義Aにおいて35回出現し、その後件として認定した部分のCU数は合計319単位となっている。講義A全体は3870単位なので、319単位をマイナスした3551単位の平均残存数と、「つまり」の後件の319単位の平均残存数を比較することになるが、この比較の際に、t検定を用いて、有意に平均値に差が見られるかを調べた。本稿では、同様の手順で、講義Aに出現した接続表現の全てに関して、その前件と後件の平均残存数の分析を行った。

### 3.3 文の接続関係による講義談話の構造分析

本稿の課題②と関係して、接続表現が談話の構造の中

でどのように文脈を展開しているかを明らかにするために、講義Aの談話の構造の分析を行った。談話の構造を分析するに当たっては、市川(1978)の文章の「文段」の分析の手法である「文の接続関係」を、講義の談話の分析に援用し、講義の談話の内容上のまとまりである「話段」<sup>注7</sup>を認定する形で、構造の分析を行った。具体的には、まず、講義Aに含まれる418文のすべての文と文の関係を「文の連節関係」によって分類

した。「文の連節関係」には、「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「同列型」「転換型」「補足型」「連鎖型」の8種があるが、筆者を含む認定者2名によりこの関係を認定した。次に、認定された結果に基づいて、「連接関係」によって、どの文とどの文が結びつき、まとまりをなすものであるか認定を行って、談話の構造図を作成した。構造図の作成に当たっては、文の「連接関係」を佐久間(1990)の記号を使用して表し、複数の文がまとまりを持つと認められる場合には、それを四角で囲み、他

【表1】講義Aに出現した接続表現とその前件、後件のCUの平均残存数

類型	接続表現	出現数	接続表現の前件のCU			接続表現の後件のCU		
			平均残存数	t値	p値	平均残存数	t値	p値
順接	だから	16	0.85	-0.86	0.389	2.38	6.69	0.001以下
	ですから	9	1.62	1.99	0.047	0.86	-1.50	0.137
	じゃ、じゃあ	4	2.58	2.75	0.008	0.94	-0.78	0.443
	そのために	1	2.75	1.34	0.179	1.00	-0.23	0.822
	そうすると	1	0.75	-0.33	0.738	0.19	-8.95	0.001以下
	そしたら	1	0.00	-29.97	0.001以下	0.00	-29.96	0.001以下
	それでは	1	0.00	-29.97	0.001以下	0.00	-1.08	0.281
	合計	33	1.07			1.49		
逆説	でも	16	0.68	-4.17	0.001以下	1.37	-0.18	0.883
	ところが	3	0.22	-11.20	0.001以下	1.81	1.31	0.189
	それなのに	1	2.86	1.90	0.058	9.00	3.17	0.510
	合計	20	0.68			1.56		
添加	で	89	0.92	-2.03	0.043	0.89	-3.86	0.001以下
	そして	14	1.81	2.19	0.031	0.86	-1.36	0.173
	それから	11	1.32	0.53	0.598	2.45	5.27	0.001以下
	また	9	1.35	0.89	0.374	0.50	-2.28	0.022
	それで	7	0.21	-13.07	0.001以下	0.08	-4.64	0.001以下
	そうして	1	0.29	-0.96	0.338	0.00	-1.08	0.281
	合計	131	1.42			0.89		
対比	一方	6	1.26	0.38	0.701	1.35	0.84	0.525
	さらに	2	7.00	2.36	0.056	1.06	-0.25	0.803
	それに対して	2	0.85	-0.86	0.389	2.00	1.29	0.198
	ないしは	2	1.36	0.44	0.657	2.29	2.21	0.027
	または	2	1.00	-0.27	0.785	1.43	0.57	0.662
	あと	1	0.00	-0.96	0.335	0.00	-1.08	0.281
	それに加えて	1	0.00	-29.96	0.001以下	2.33	1.49	0.136
	合計	16	1.28			1.54		
同列	つまり	35	1.29	0.98	0.327	2.04	7.04	0.001以下
	たとえば	17	1.55	1.86	0.065	0.63	-2.33	0.019
	要するに	3	0.00	-29.98	0.000	0.00	-3.02	0.024
	すなわち	1	0.00	-0.96	0.335	0.00	-6.81	0.496
	っていうか	1	1.33	0.13	0.893	0.40	-0.70	0.483
	合計	57	1.30			1.52		
転換	そもそも	1	0.00	-0.96	0.335	0.00	-0.96	0.355
	いずれにしても	1	0.50	-3.66	0.003	1.56	0.70	0.487
	さて	1	0.75	-0.33	0.738	2.33	1.22	0.224
	とりあえず	1	0.28	-7.59	0.001以下	0.00	-29.97	0.001以下
	まず	1	0.00	-29.96	0.001以下	1.18	0.05	0.963
	合計	5	0.29			0.96		
補足	ただ	6	0.94	-0.82	0.412	1.11	-0.14	0.886
	実は	3	2.25	1.85	0.064	2.96	3.65	0.001以下
	というのほ	2	1.64	0.78	0.438	0.77	-0.71	0.566
	合計	11	1.20			1.40		
接続表現合計		272						

のまとまりとの関係が把握できるよう図示し、これを元に話段の決定を行った(4.2節【図1】【図2】【図3】を参照)<sup>注8</sup>。さらに、個々の接続表現の分析に当たっては、接続表現と文章・談話の構造の関係について論じた佐久間(1992, 2002)が、「接続表現の文脈展開機能」として、接続表現の機能に関し、「A話題開始機能」「B話題継続機能」「C話題終了機能」という分類を行って、ある話段において、話題が開始され、継続され、終了される際に、接続表現がどのような機能を持つのかを分析していることから、本稿ではこれを踏まえ、話段の内部をさらに「開始部」「継続部」「終了部」の三つに区分し、各部分で接続表現がどのように

【表2】「つまり」の後件の残存数 文脈展開しているかを分析することとした。

	文番号	残存数
1	299	6.40
2	209	6.38
3	204	6.33
4	153	5.71
5	306	5.67
6	391	5.00
7	121	4.33
8	83	4.25
9	109	4.17
10	34	3.17
11	22	3.13
12	54	2.67
13	322	2.67
14	356	2.62
15	266	2.50
16	50	2.33
17	166	1.60
18	190	1.17
19	392	1.12
20	173	1.10
21	99	1.00
22	317	1.00
23	396	0.78
24	100	0.71
25	186	0.68
26	18	0.67
27	193	0.57
28	374	0.50
29	384	0.50
30	183	0.33
31	316	0.33
32	24	0.00
33	324	0.00
34	100	0.00
35	196	0.00

## 4. 分析結果

### 4.1 接続表現の前件と後件の CU の平均残存数の分析結果

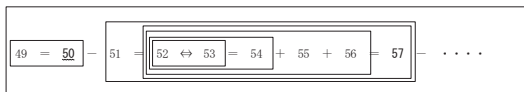
分析の結果、【表1】のように、講義Aでは、全36種類の接続表現が、延べ272回にわたって使用されており、そのうちt検定(危険率1%以下、表中灰色の部分)によって、接続表現が用いられることで、その前件ないし後件のCUの平均残存数が、接続表現が用いられていない場合よりも有意に多くなると判明したのは、前件では、「じゃ、じゃあ」<sup>注9</sup>の1種、後件では、「つまり」「だから」「それから」「実は」の4種であった。講義A全体は3870CUからなっているが、分析の結果、講義全体のCUの平均残存数は1.15となっており、これらの接続表現が用いられた個所では基本的に平均残存数がこの1.15という数値より高くなっている。本稿の課題①は、「講義談話において、受講ノートを取る際の手がかりとなりうる接続表現を特定する」ということであったが、t検定の結果から言えば、「じゃ、じゃあ」「つまり」「だから」「それから」「実は」の5種が用いられた場合には、その前件ないし後件の情報が受講ノートに取られており、これらが手がかりとなりうる接続表現と、まずは、言うことができる。

## 4.2 講義の談話構造と接続表現の機能の分析結果

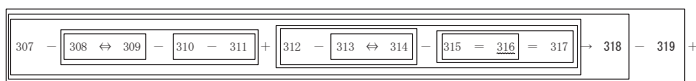
前節では、受講ノートを取る際の手がかりとなりうる接続表現として、5種の接続表現を挙げたが、実はこれらの接続表現が用いられた場合にも、その前件や後件に含まれるCUの残存数が低い場合があり、これらの接続表現が受講ノートの手がかりになっているとは直ちには言い難い場合がある。例えば、5種の接続表現のうちの一つである「つまり」の後件のCUの平均残存数を見ていくと、【表2】のように、「つまり」が用いられた全35文中、4文では、平均残存数が0となっている。「つまり」は、統計的な分析から全体的な傾向としては、受講ノートを取る手がかりになりうるといえるが、「つまり」の後件のCUの残存数が0になる場合もあり、「つまり」がどのような場合に受講ノートを取る際の手がかりになり、どのような場合に手がかりとならないかについては、さらなる分析を行う必要があると考えられる。そこで、本稿では、前節で挙げた5種の接続表現に対して、さらに談話の構造の中でどのように文脈を展開しているかという観点から分析を加え、どのような場合に接続表現が受講ノートを取る際に手がかりになりうるかを検討した。接続表現を談話の構造との関わりで分析するに当たっては、まず、3.4節で分析した話段の構造のどこで接続表現が用いられているかを調べた。3.4

【図1】話段の開始部に「つまり」が用いられている場合

(番号は文番号。下線は「つまり」が用いられた文を示す。【図2】【図3】も同様。)



【図2】話段の継続部に「つまり」が用いられている場合



【図3】話段の終了部に「つまり」が用いられている場合



節の分析の結果、講義Aは全体で59の話段からなることが明らかとなったが<sup>10</sup>、その話段の内部を開始部、継続部、終了部に分けた場合に、例えば、「つまり」は、【図1】【図2】【図3】の談話の構造図が示しているように、話段の開始部、継続部、終了部でそれぞれ用いられることが明らかとなった。本稿では、同様に5種の接続表現の全てについて、話段の開始部、継続部、終了部のどの位置で用いられるかを分析した。そし

て、この分析結果に基づいて、出現回数と平均残存数を求め直したものが【表3】である。【表3】に見られる通り、接続表現は話段における出現

【表3】 接続表現の出現位置と残存数 位置によって、平均残存数が異なる。

接続表現	出現数	平均残存数
「じゃ、じゃあ」の前件		
開始部	3	2.74
継続部	1	1.63
終了部	0	φ
全体	4	2.58
「つまり」の後件		
開始部	8	2.08
継続部	17	1.29
終了部	10	2.94
全体	35	2.04
「だから」の後件		
開始部	0	φ
継続部	8	1.07
終了部	8	3.44
全体	16	2.38
「それから」の後件		
開始部	2	3.82
継続部	8	1.11
終了部	1	4.73
全体	11	2.45
「実は」の後件		
開始部	1	7.63
継続部	2	0.47
終了部	0	φ
全体	3	2.96

例えば、「つまり」の後件のCU全体の平均残存数は2.04であるが、「つまり」が話段の終了部で用いられた場合には、2.94と残存数が増え、逆に継続部で用いられた場合には、1.29と残存数が少くなっている。「つまり」以外の接続表現についても同様の傾向が見られ、いずれの接続表現も話段の開始部、終了部で用いられた場合には、平均残存数が多くなり、継続部で用いられた場合には、平均残存数が少なくなる傾向が見られた。

本稿の第二の課題は、課題②「①で特定された接続表現が談話の構造の中でどのように文脈を展開しているかを分析し、談話の構造との関係で、どのような場合に接続表現が受講ノートを取る際の手かがりとなるのかを具体的に明らかにする」ということであったが、こうした話段内部の位置による残存数の違いを、さらに講義談話の文字化資料に

戻り、5種の接続表現が話段の構造の中でどのように機能しているかという観点で分析したところ、それぞれの接続表現と受講ノートを取るという行為の間には、以下のような関係があることが明らかとなった<sup>註11</sup>。

### 「じゃ、じゃあ」について

- ①話段の開始部で、「じゃ、じゃあ」によって、前の話段の帰結を受けて、次の話題が展開される際には、「じゃ、じゃあ」の前件にあたる前の話段の帰結の部分の情報が受講ノートに取られる。
- ②話段の継続部で、「じゃ、じゃあ」が話段の開始部での話題の提示を受けて、具体例の検討に入る際に用いられている場合には、「じゃ、じゃあ」の前件の情報が受講ノートに取られる。

### 「つまり」について

- ①話段の開始部で、「つまり」が、その話段の話題を言い換えて、分りやすく説明するために用いられている場合には、言い換えが先行する



1文に対してしか行われていない場合も、「つまり」の後件の情報が受講ノートに取られる。

- ② 話段の継続部で、「つまり」が先行する1、2文の言い換えしか行っていない場合は、「つまり」の後件の情報が受講ノートに取られるとは言えない。
- ③ 話段の終了部で、「つまり」が先行する複数の文をまとめて、言い換えている場合には、「つまり」の後件の情報が特に受講ノートに取られる。

#### 「だから」について<sup>注12</sup>

- ① 話段の継続部で、「だから」が直前の1、2文のみの帰結を表すために用いられている場合には、「だから」の後件の情報が受講ノートに取られるとは言えない。
- ② 話段の終了部で、「だから」を含む文が現れ、その文がそれまでの話段全体の論理的帰結となっている場合は、「だから」の後件の情報が特に受講ノートに取られる。

#### 「それから」について

- ① 話段の開始部で、「それから」が用いられ、先行する話段と当該の話段とをつなぐ働きを有している場合には、「それから」の後件の情報が受講ノートに取られる。
- ② 話段の継続部に「それから」を含む文が現れ、前の項目に次の項目を付け加えるためにのみ用いられている場合には、「それから」の後件の情報が受講ノートに取られるとは言えない。
- ③ 話段の終了部に「それから」を含む文が現れ、幾つかの項目を網羅的に列挙する中で用いられている場合には、「それから」の後件の情報が受講ノートに取られる。

#### 「実は」について

- ① 話段の開始部で、「実は」が用いられ、その話段でこれから展開されるようとする話題を明らかにする働きを有している場合には、「実は」の後件の情報が受講ノートに取られる。
- ② 話段の継続部に「実は」を含む文が現れ、その話段で展開されているのは話題に対して、補足的な説明を加えている場合には、「実は」の後件の情報が受講ノートに取られるとは言えない。

5種の接続表現は、統計的な分析の結果に従えば、全体的傾向としては、受講ノートを取る際の手がかりとなりうるものであるが、上記の分析のように、談話の構造の中でどのように文脈を展開しているかという観点を取り入れれば、接続表現が手がかりとなりうる場合と、そうでは

ない場合をさらに絞り込むことができる。単純に、特定の表現を受講ノートを取る際の手がかりとするのではなく、談話の構造を考慮に入れることが、講義の談話から情報を選択し、受講ノートを取る際には必要であるということがこの分析結果から示唆されるのではないだろうか。

## 5. まとめ

### 5.1 本稿の結論

「1. はじめに」で示した課題①と課題②に対して、本稿は、以下の2つの結論を得ることができたと考える。

- ① 接続表現の前件ないし後件と、接続表現が用いられていない部分のCUの平均残存数をt検定を用いて比較した結果、「じゃ、じゃあ」「つまり」「だから」「それから」「実は」の5種の接続表現が受講ノートを取る際の手がかりとなりうるということが明らかとなった。
- ② 文の接続関係によって講義談話の話段を認定して、これらの5種の接続表現が話段の開始部、継続部、終了部のどの位置に現れるかを調べたところ、現れる位置によって、平均残存数が異なり、接続表現が談話の構造との関わりにおいて、受講ノートを取る際の手がかりとなりうるということが明らかとなった

### 5.2 本稿の意義と今後の課題

本稿は、講義の談話と受講ノートを実証的に分析して、接続表現が受講ノートを取る際の手がかりになりうることを明らかにしたが、方法論的には、統計的分析、話段の構造分析など、先行研究では用いられなかった手法を用いることによって、より精緻な結論を得ることができたと考える。また、本稿の結論は、受講ノートをいかにして取るかという大学生や留学生が抱える実践的な課題にも一部資するものとなるだろう。

ただ、本稿には、資料と方法の面で、なお改善する余地があることも確かである。資料については、やはり分析の対象となった講義が1講義であったことは、本稿の分析の限界を示している。資料数を増やし、文系、理系合わせて、内容的にも偏りのない資料を集め、さらに分析を進めることが必要であろう。また、方法論的には、本稿では、文章における文段の認定方法である「文の接続関係」を用いて、話段の認定を行ったが、談話の構造の分析については、音声や非言語行動など、談話固有の要因も考慮すべきであり、改善すべき点が少ないと思われる。その他、接続表現以外に受講ノートを取る際の手がかりとなるものは何かという、次なる課題もあり、今後、研究すべきことは山積している。

## 【注】

1. 本稿では、「接続表現」を、佐久間(1992)に従って、いわゆる接続詞のみならず、接続詞と同等の機能を持つと考えられる副詞的表現(「実は」「そもそも」等)や句(「それに対して」「それに加えて」等)などを含めたものとして捉えている。なお、本稿の接続表現には、いわゆる「接続助詞」は含まれない。
2. 講義Aは、講義中、「つまり」を「話」と漢字で書く板書が一回だけ行われたが、他は全て音声のみによって進められた。
3. 本稿では、接続表現の前後の1文ないし1節の情報が受講ノートに取られるかを調べているが、実際には、接続表現によって複数の文ないし節が繋がれる場合もあり、その全てについて調べるべきところではある。しかし、接続表現の前件と後件とがどこまでかを客観的に認定する手法は十分に確立されておらず、現状では十分な認定を行うことが難しい。本稿では、客観的に認定できる前後の1文ないし1節の情報のみを分析の対象とした。
4. 以下の16類と下位分類35種からなり、講義Aに関しては、単位切りと同時に機能上の分類が複数の認定者によって行われた。本稿の接続表現の認定はこの際の認定に従っている。(1. 文末叙述表現 2. 節末叙述表現 3. 修飾表現 4. 引用表現 5. 提題表現 6. 状況表現 7. 注釈表現 8. 接続表現 9. 応対表現 10. 参照表現 11. 感応表現 12. 反復表現 13. 省略表現 14. 挿入表現 15. 転換表現 16. 非言語表現)
5. 小沼・田中(2010)は、本稿と同じ講義Aを分析して、CUが受講ノートの分析にあたって、方法論的に有効であることを論じている。
6. 本稿の統計分析には、PASW Statistics 17.0(旧 SPSS)を使用した。
7. 「話段」とは、佐久間(1987)などにおいて提唱されている文章の「文段」に相当する談話の単位である。
8. 記号はそれぞれ「→」が「順接型」、「Z」が「逆接型」、「+」が「添加型」、「⇔」が「対比型」、「=」が「同列型」、「↓」が「転換型」、「←」が「補足型」、「-」が「連鎖型」を表している。本稿では、講義A全体の418文について、このような図を作成しているが、この分析自体は伊能(2006)で行ったものである。
9. 本稿では「じゃ」「じゃあ」を異なる接続表現とは考えず、同一の接続表現として認定した。
10. ここでいう話段とは、文と文とが結びついて内容上のまとまりを形成するようになる、最小次元の話段のことである。分析の結果、講義Aでは、この最小次元の話段と話段とが更に結びついて、より大きな上位の話段を形成し、最大で7次元の話段の階層を持つ談話であることが明らかとなった(伊能2006)。
11. 「じゃ、じゃあ」「それから」「実は」の分析については、出現回数が1、2度しかないケースもあり、結論は暫定的なものに留まるが、記述を試みた。

12. 本稿では、「だから」と「ですから」を区別したが、「ですから」のほうが平均残存数は少ない。「ですから」は、出現回数 9 回中、話段の開始部で 2 回用いられるなど、「だから」と用法が異なることにその原因があると思われる。

#### 【参考文献】

- 石黒圭(2010)「第 7 章 講義の談話の接続表現」佐久間編著(2010) pp. 138-152
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊能裕晃(2006)「外国人留学生に対するノート・テーキング指導のための基礎的研究」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文(未公開)
- 小沼喜好・田中啓行(2010)「第 12 章 受講ノートの理解と表現」佐久間編著(2010) pp. 241-256
- 西條美紀(2007)『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』科学研究費補助金研究成果報告書
- 佐久間まゆみ(1987)「『文段』認定の一基準 (1) -提題表現の統括-」文藝・言語研究言語篇 1 1、筑波大学文芸・言語学系 pp. 35-66
- 佐久間まゆみ(1990)「1 接続表現(1)」寺村秀夫ほか編『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう pp. 12-23
- 佐久間まゆみ(1992)「接続表現の文脈展開機能」日本女子大学紀要文学部 4 1 pp. 9-22
- 佐久間まゆみ(2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店 pp. 117-189
- 佐久間まゆみ編(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編(1994)『要約文の表現類型』ひつじ書房
- 佐久間まゆみ編著(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 田中啓行(2009)「受講ノートの文の認定と文末文体」早稲田日本語研究 18 pp. 36-47
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 信森あづさ・鈴木香子(2007a)「接続表現からみた要約文 AY の表現類型」西條(2007)pp. 190-194
- 信森あづさ・鈴木香子(2007b)「接続表現からみた要約文 BY の表現類型」西條(2007)pp. 211-215

【謝辞】共同研究のデータ使用を許可して下さった、文章・談話研究会の佐久間まゆみ教授をはじめ、諸先生方ならびに西條美紀先生に感謝申し上げます。